椿の花も その首も

twnovel おりほん
3
～怪奇編～

この内容は、suwazo が 2010 年 2 月～2013 年 5 月にかけて twitter で呟いた twnovel（※140 文字、ただしタグを除けば 131 文字の小説）のうちの 11 本に、新作を 1 本加えたものです。
suwazo@twitter
2013 年 5 月

いつの日か
優しい土に落ちるでしょう
椿の花もその首も

生まれるなり、赤ん坊はしくしくと泣き始めた。「前の世が恋しいのだ」と赤ん坊は言う。「だがもうすぐ俺はすべてを忘れてしまうだろう。それが哀しい」その言葉通りきっかり 10 秒後、赤ん坊はオギャアオギャアと普通に泣き出した。医師は「女の子です」とその母親に告げた。

一年ぶりに訪れる田舎町。無人駅で降りた途端に降り注ぐ強烈な夏の日差し。「大人っぽくなったね、圭ちゃん」そっと差し掛けられる白い日傘。祖母の家まで、小さな日傘で無理やり相合い傘をして歩く。毎年の恒例。圭は父の名で、彼女は父の姉で、僕が生まれる前に亡くなっている。

博士、私がフラスコの底で生まれた時、最初に見たのは貴女の笑顔でした。貴女の命じるままどんな悪い事でもしたけれど、貴女は二度と笑わなかった。やっと解りました。あれはフラスコの硝子が見せた歪みに過ぎなかったのだと。貴女は笑ったことなど一度もないのだと。哀れな博士。

それは何の変哲もないただの蝸牛に見えた。「こいつはもう百年も生きているんだよ」こんな小さいのに？「この螺旋は外側でなく内側に向かって成長しているんだ。ほら」蝸牛を耳に近づけると歌声が聞こえた。知らぬ言語、有り得ない発音。「内側はどこか別の空間まで到達している」

道端で死んでいたホームレスの女の指から、不似合いな指輪を掠めとった。赤い石。古具屋に売りにゆくと、店の主は机の下から箱を取り出した。「みんな盗むんだ」中にはたくさんの同じ指輪。赤い石。「あの女、盗まない奴が現れるまで成仏できないのさ」手が熱い。掌の中に、赤い石。

母の手術中、父がふいに語り始めた。「母さんは子ができない体でな」「えっ」「それでも自分の子を欲しがって、そのうちお前を身ごもった。想像妊娠だったが」「何だよそれ」「母さんはその後も想像し続けた。お前の成長を」理解できない。僕は何なのか。母が死んだらどうなるのか。

舟が来る。渡し守が告げる。「一人だけだ」友を押しのけて私は舟に乗る。「出して下さい」「あいよ」舟が出発する。友は岸に立って、呆然とこちらを見ている。その姿が薄れてゆく。炎上した事故車から、友が救出される。運転席の私はもう間に合わない。川を流れてゆく。静かに。

月の夜は時々道に迷う。家に帰ると兄がいて僕の生活態度やら何やら細かく注意し始めた。流石に苛立ってきた頃「ま、お前にしちゃうまくやってる。奥さん大事にしろ」と解放してくれた。家を出て妻の待つアパートへ帰る。雪崩で生家が兄ごと潰れたのは十年前。月の夜は時々道に迷う。

彼は消防士として百人を救ったが、たった一人救えなかった少女に憑かれた。焼けただれた少女はいつも背後から彼を見ていた。パチパチ。定年退職する彼に同僚が花束と拍手を贈る。パチパチ。少女も彼に白い花を渡し拍手をする。少女はいつも見ていたから。火の中に飛び込んでゆく彼を。

かーえーるーのーうーたーがー（ねえ）きーこーえーてーくーるーよー（私の声、聞こえる？）ゲロ（去年の夏の夜）ゲロ（貴方は私を連れて、蛙が合唱してる田んぼ道を抜けて）ゲロ（山奥深くまで分け入って）ゲロ（私を殺して土に埋めたの）ゲロゲロゲロゲログワッグワッグワッ……

「私の一族は幼い頃から歌を教え込まれますの。綺麗な歌だけを、心に染みつく程にね。一族はみな例外なく非常に優秀な頭脳を持つのですけど、歳を重ねるとみな例外なく狂います。そうなったら毎日ただ歌をうたいますの。そのときのために、幼い頃から歌をたくさん覚えますのよ……」

探偵が生まれた。一族に探偵が生まれるのは数十年ぶりのことで、親戚中大騒ぎである。探偵が生まれたということは、近隣で助手も生まれる、もしくは産まれている可能性が高い。将来、血生臭い事件を解決することになるだろう赤ん坊は、まだ何も知らず、縁側ですやすや眠っている。